

体験活動から学ぶコミュニティ政策学

瀧 直 也^{*}

I はじめに

2008年中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」の中で「社会からの信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育の構築」の実現を掲げ、これらの改革にあたって3つの教学経営方針を示している。一つめは、「学位授与の方針」である。それは、「幅広い学びを保証し、21世紀型市民に相応しい学習成果の達成を」期待するものであり、卒業までに学生がどのような能力の習得を目指すのかをできるだけ具体的に示し、教育課程の体系化・構造化をはかって「学習成果」を達成すべきというものである。二つめは、「教育課程編成・実施の方針」である。それは、「学生が本気で学び、社会で通用する力を身につけるよう、きめ細やかな指導と厳格な成績評価を」期待するものであり、大学全入時代では、教育課程の内容にとどまらず、指導方法、成績評価の改善が重要であり、学生の多様化に応じた学習者本位の改革が必要であるという。三つめは、「入学者受入の方針」である。それは、「入学者受け入れ方針を明確にし、高等学校段階の学習成果の適切な把握・評価を」期待するものである。これは、大学が入学者を「選択」する時代が終わり、むしろ入学者が「選択」する時代が変わったことを示唆するものである。大学と入学者のマッチングをはかり、入学者の適切な学力把握を行った上で教育を実施する必要があると指摘している。

学士課程教育の方針に則り、淑徳大学にコミュニティ政策学部が新設された。同学部では、社会学、経済学、法学、政策学を4つの基礎的学問分野と設定し、事象を多角的に捉えていることを目指している。また、「サービス・ラーニング」の手法を取り入れている。「サービス・ラーニング」は、ボランティア活動等の他者へのサービスばかりではなく、インターンシップや各種実習のようにもっぱら学習者となるばかりでもなく、その中間に位置し、二つを統合するものである。学生が活動分野を自発的に発見・選択し、一定期間、無償で社会奉仕活動を行い、そこでの体験を自らの学問研究と人間形成に発展させていく教育手法と言える。

^{*}コミュニティ政策学部 講師

本稿では、国の施策や筆者の授業実践から、今後のサービス・ラーニングによる体験活動を用いた、コミュニティ政策学のよりよい学習方法を探るものである。

Ⅱ 国の教育施策

1. 地域社会における体験活動の重要性

1998年、中央教育審議会は「21世紀をめざしたわが国の教育の展望」の中で、「これからの地域社会における教育の在り方」について、子どもたちの「生きる力」をはぐくむために、地域社会の中で大人や様々な年利の友人と交流し、様々な生活体験、社会体験、自然体験を豊富に積み重ねることが大切だと述べている。また、これらの地域社会の体験活動は、子どもが自らの興味・関心や自らの考えに基づいて自主的に行っていくという点で特に大きな意義があると述べている。

2008年、文部科学省は「教育振興基本計画」第3章「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」の中で、基本的方向を「社会全体で教育の向上に取り組む」と示し、「身近な場所での学習機会の充実」を掲げている。さらに、以下のような4つの項目に分け、その中で「地域ぐるみ」や、「地域社会」、「連携」といったキーワード挙げている。

- ①学校・家庭・地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させる
- ②家庭の教育力の向上を図る
- ③人材育成に関する社会の要請に応える
- ④いつでもどこでも学べる環境をつくる

2008年、中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」の中で、教育課程編成・実施の方針についての具体的な改善方策として「大学間や地域の諸団体との連携・協力を強化し、学生に対する教育内容を豊富化する」と挙げている。これは、地方公共団体をはじめとする地域の諸団体との連携・協力を推進し、地域の教育資源や教育力を活用することや、大学の個性・特色に応じて、地域社会に貢献する人材の育成に取り組むことを期待するものである。

2. 子ども農山漁村交流プロジェクト

(1) 三省連携のプロジェクト

2008年、文部科学省は「教育振興基本計画」第3章「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」の中で、「①学校・家庭・地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させる」と掲げ、「関係府省が連携して、小学校で自然体験・集団宿泊体験を全国の児童が一定期間（例えば1週間程度）実施できるよう目指すとともに、そのために必要な体験活動プログラムの開発や指導者の育成を支援する。」と述べている。

これを受け、平成21年「子ども農山漁村交流プロジェクト」が発足した。このプロジェク

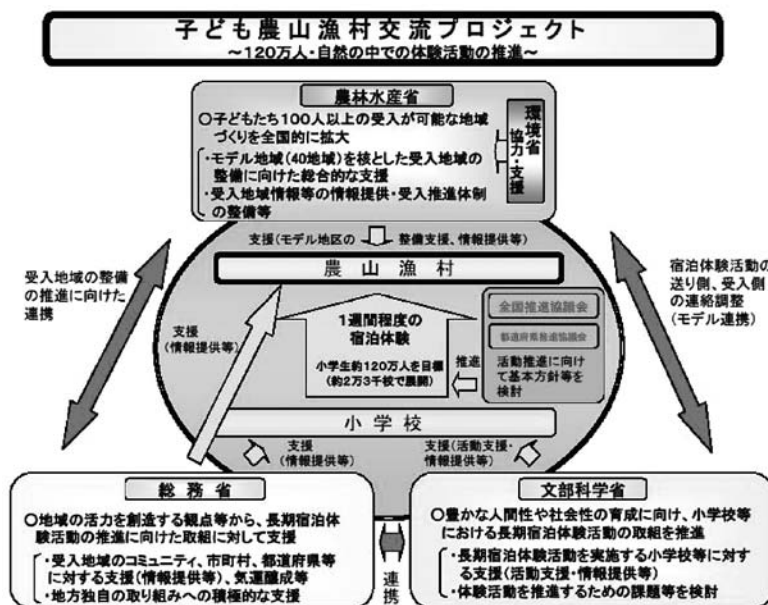


図1. 子ども農山漁村交流プロジェクト概要

トは、農林水産省、文部科学省、総務省が連携し、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い子どもの成長を支える教育活動として、小学校における農山漁村での宿泊体験活動を推進するものである。また、数値目標として、全国2万2千校の小学校(1学年規模120万人)で体験活動を展開することを目指し、小学校における宿泊体験活動の取組の推進、農山漁村における宿泊体験の受入体制の整備(目標500地域)、地方独自の取組への積極的な支援を行うことを掲げている。図1は、「子ども農山漁村交流プロジェクト」の概要である。

3省がそれぞれの立場から、プロジェクトを推進すべく、小学校や農山漁村に様々なアプローチを行っている。農林水産省では、受入可能地域整備や受入地域の情報提供を、文部科学省では、小学校へ長期宿泊体験活動の推進を、総務省では、受入地域のコミュニティ、市町村、都道府県等に対する支援を行っている。

(2) 取組事例

子ども農山漁村交流プロジェクトを受け、財団法人都市農山漁村交流活性化機構が中心となり、全国で多くの学校、地域が一丸となり、多くの取組を行っている。その多くが、小学校と地域との橋渡し役として、各市町村職員が間に入り、様々な調整を行っている。

①新潟県妙高市の取組

新潟県妙高市では、独立行政法人国立青少年教育振興機構国立妙高青少年自然の家（以下、妙高自然の家）と連携し、新潟県中越・下越や東京都等の小学校を受け入れている。新潟県妙高市は長野県との県境に位置し、妙高山の裾野に広がる、豪雪地帯として有名な地域である。宿泊体験活動を行う場合は、妙高自然の家をベースに、妙高市内の杉野沢地区の農家民宿で行っている。杉野沢地区はスキーが有名な場所であり、約50軒の農家民宿が営業しており、150名以上の学校団体であっても受入が可能な地域である。民宿との連絡・調整を行っているのは妙高市グリーン・ツーリズム推進協議会（妙高市役所農林課内）である。また、連絡・調整に留まらず、民宿での活動やトレッキング等の全体的なプログラムには、妙高市グリーン・ツーリズムインストラクターや新潟県認定「なりわいの匠」の指導者が指導を行っている。この他にも、妙高市教育委員会のこども教育課、生涯学習課の職員、観光商工課の職員が企画段階から、連絡・調整等を行っている。

②長野県駒ヶ根市の取組

長野県駒ヶ根市では、駒ヶ根市ふるさと子ども交流推進協議会を組織し、千葉市内の小学校を受け入れている。駒ヶ根市は、長野県南部に位置し、3,000m級の山々が連なる中央アルプスと南アルプスに囲まれた自然豊かな伊那谷の田園都市である。体験を通じて都市と農村の交流を図る目的で設置された「駒ヶ根ふるさとの家」を滞在拠点に、南信州の里山で様々な体験をおこなうことができる。また、各体験活動の指導は地域の年長者等が行っている。窓口は、駒ヶ根市役所産業振興部農林課が行っている。

以上のような取組の他、様々な地域においても、各市町村の農林課や観光課が窓口となり、グリーン・ツーリズム、青少年教育施設等と連携し、都市部の小学校を多く受け入れている。また、地元のNPO法人で自然学校や地域のネットワークづくりを行っている団体が窓口となっているケースもある。

(3) 地域の力を生かした教育

子ども農山漁村交流プロジェクトの発展は、子どもの教育に効果があるだけでなく、地域の連携を強化し地域の活性化につながるものと考えられる。学校を受け入れるために、地域の歴史や文化が見直され、その結果、地元に対して自信を持ったり、子どもとの交流によって意識の活性化が図られたりすることで、地元住民に活力をもたらすことが期待される。また、地域の特色を生かすため、地域の人材を活用して体験を行ったり、地場産品を食材に用いたりすることが多く、地域内の他産業にもたらす経済波及効果が増大すると考えられる。

現在、日本国内の山間部において過疎化が叫ばれ、地域の力が失われつつある。しかし、本プロジェクトの推進は、そういった山間部の連携や、地域力の向上を押し進めるものである。

Ⅲ 体験活動の現状

国立青少年教育振興機構は、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」において、幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験（「子どもの頃の体験」）とそれを通じて得られる資質・能力（「体験の力」）の関係性を把握し、学校や地域、家庭において、どの年齢期にこういった体験が重要になるのかを明らかにするため、青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動の推進に関する調査研究を行った。

調査は、子どもの頃の体験（自然体験、動植物とのかかわり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い）と体験の力（自尊感情、共生感、意欲・関心、規範意識、人間関係能力、職業意識、文化的作法・教養）についてそれぞれ調査項目を作成し、成人（20代～60代）対象のウェブ調査と、青少年対象の質問紙調査により、それぞれ得られた回答を得点化し、子どもの頃の体験と「体験の力」の関係性をみたものである。

調査対象の内訳は、成人対象の調査では20代～60代の成人5,000人（各年代で男女各500人）、青少年を対象とした調査では、小学5年生2,860人、小学6年生2,830人、中学2年生2,480人、高校2年生2,844人であった。

成人を対象とした調査の結果から、本研究において特筆すべきものを以下に挙げた。

- ①子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多く、モラルや人間関係能力が高い人が多い。
- ②子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、「丁寧な言葉を使うことができる」といった、日本文化としての作法・教養が高い。
- ③自然体験や友だちと遊ぶ体験は若い世代ほど少ない。幼少期の家族行事の体験は若い世代ほど増えている。

中でも、①については、子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」「地域活動」等の体験が豊富な人ほど「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」「友だちに相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高いという結果が出ている。

以上のように、青少年期の体験がその後の能力に影響を及ぼすこと、年代が若くなるにつれ体験が少なくなってきたことが伺える。社会の中で生活をしていく上で必要な「人間関係能力」や「規範意識」といった能力が体験活動によって育まれることも推察できる。

Ⅳ 「コミュニティ研究Ⅱ」の取組み

1. 授業概要

淑徳大学コミュニティ政策学部的一年次の必修科目である「コミュニティ研究Ⅱ」は、夏

季休業中の2泊3日の合宿型を中心に行われた。授業の目的、実施の概要は、以下の通りである。

(1) 授業目的

本授業は地域活動の現場に赴き、活動に主体的に参加し、直接体験から学ぶことを通して、学習の方法や、他者とのネットワークづくり、主体的な意識の醸成を図り、コミュニティ研究Ⅰでの学びを展開していく場とする。」である。

単に体験するだけの授業ではなく、サービス・ラーニングの理念から、活動に直接的に関わることで、実際の生の情報や意見等を学び得る場である。

(2) 平成22年9月1日～3日【2泊3日】

(3) 千葉県立君津亀山少年自然の家および周辺

(4) コミュニティ政策学部教員，サービスラーニングセンター教職員

(5) 淑徳大学総合福祉学部3・4年生10名

(6) プログラム

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 |
|----|--------------------------------|---|---------------------------------|
| 午前 | 大学集合・出発 自然の家到着 オリエンテーション | フィールドワーク ①農業②林業③畜産 ④観光⑤農業⑥産業 ⑦漁業 | フィールドワークのまとめ 発表準備 活動報告の発表 |
| 午後 | 課題解決ハイク 野外炊事 | | マインドクロッキー 自然の家出発 |
| 夜 | フィールドワークについて | 夜のつどい・ふりかえり | |

(7) 主なプログラムの内容

・課題解決ハイク

グループごと自然の家周辺のチェックポイントをまわりながら課題を解決していく。
主な内容は「エレクトリックフェンス」「森のビンゴ」「森のつながり探し」。

・フィールドワーク

7つのコースに分かれ活動を行った。

・夜のつどい

小さな焚き火を囲み、今日一日をふりかえるとともに、本授業や学生生活、人間関係、将来のことについて語りあった。

・発表準備と寄せ書き作り

2日目の活動内容を全体で発表するべく、発表の準備を行った。また、同時にお世話になったフィールドワーク先の方への感謝の寄せ書きを作成した。

・活動報告の発表

全体の前でそれぞれの活動内容を発表した。自分以外のコースがどんな内容をおこなっていたのかを理解する場となった。

・マインドクロッキー

3日間の活動を思い起こし(今回は写真をスライドショーで流し、きっかけをつくった)、その中で印象に残ったこと、記憶に残ったこと、楽しかったこと、学んだこと等を個人で1枚の紙に表現した。表現の仕方は自由で、絵や詩を書いた者もいた。

2. 主体的な学びとネットワークづくり

本授業を企画するにあたり、淑徳大学コミュニティ政策学部のアドミッションポリシーを踏まえ、学生が主体的に実践し、体験から学ぶ経験を意図的に設け、今後の学習の方法や、他者とのネットワークづくり、主体的な意識の醸成を図る場を設けることを中心に据え、プログラムデザインを行った。

また、現在の学生が便利な社会に育ち、主体性や協同性が欠けていると言われている現状から、あえて不便な環境の中で活動を行うことで、自ら動く、考えるという意識を育むことを意識した。

本授業の付帯的な効果として、将来、公務員を目指す学生にとって、自治体や学校、公民館等で取り組まれている自然体験活動の手法を体験し学ぶことや、授業が行われない夏季休業中に行うことで、後期からの学校離れをくい止める方策にもなることが考えられた。

学生が主体的に学び、自ら集団と関わることや集団の中で活動ができるよう、以下のような点を工夫した。

①クラスを越えた班構成

2日目のフィールドワーク先を基本とし、通常のクラスを越えたメンバーでグループ編成を行った。これは、普段の大学生活とは異なる仲間と三日間ともに生活することで、新たな人間関係の構築および、グループづくりからグループワークへの経験をさせるためである。

②班長等の役割を設けた主体的参加の醸成

各班に班長を設定し、学生自身が責任をもって主体的に活動に参加できるよう促した。

③グループづくりとグループワークをねらった初日のプログラム

ほぼ初対面のメンバーが集まり、グループで意思決定をして活動するという過程を経験することで、グループで課題を解決する際のコミュニケーションの重要性等を学ぶ場と設定した。

3. 7つのコースのフィールドワーク

2日目に設定した、本授業の中心プログラムであるフィールドワークでは、農業(稲作・畑作)、林業、畜産、観光、産業、漁業といった様々な業種に関わることで、生業を直接体

験すると共に、各業種が抱えている問題や行政に期待すること等、生の声を聞くことができるプログラムである。

君津亀山少年自然の家に、農業、林業、漁業、畜産、観光といった内容を依頼し、それに見合った場所をリストアップしていただいた。その中から、活動内容等からフィールドワーク先を選定するとともに、産業についてもフィールドワーク先の開拓をお願いし、7つの業種のフィールドワーク先を決定した。

実際の活動内容については、サービス・ラーニングをキーワードに、小・中学校の体験ではなく、作業的な内容を中心にしていただくよう依頼し、学生がお客様ではなく一従業員として従事できるよう打合せを行った。

学生たちには、事前に7業種の中から希望するもの(第3希望まで提出後調整)を選択してもらい、行かされるという感覚ではなく、自ら選ぶことで積極的な動機付けを行った。また、事前学習として各々のフィールドワーク先について調べ学習を行った。

各コースの主な活動内容は表1の通りである。

表1 「コミュニティ研究Ⅱ」フィールドワークの活動内容

| | 業 種 | 受入機関 | 活動内容 |
|---|--------|-----------|----------------------|
| 1 | 農業(稲作) | 棚田の保存会 | 縄もじり、稲刈り、脱穀、野焼き等 |
| 2 | 林業 | 民間団体 | 薪割り、丸太の遊具作り(伐採、皮むき等) |
| 3 | 畜産 | 個人経営 | 羊毛ストラップ作り、堆肥まき |
| 4 | 観光 | ボランティアガイド | ガイド体験、史跡めぐり |
| 5 | 農業(畑作) | 個人農場 | 農場見学、袋詰め、販売店見学 |
| 6 | 産業 | 産業廃棄物処理場 | 環境実験、処理場見学 |
| 7 | 漁業 | 漁港 | 漁港散策、聞き込み調査、鰹節づくり |

4. ふりかえりとシェアリング

一般的に、まとめとして授業後にレポートの提出等を義務づけることが多い。しかし、体験が生き生きとしている、その場でふりかえりを行うことで、体験した内容を記憶に留め、より深い学びにつなげることができると考えられる。そこで、3日目に7つのフィールドワークの内容を、グループごとにまとめ、全体でシェアする場を設けた。また、グループでのふりかえりの後、個人で活動をふりかえる場を設け、今回の体験を受け、自分自身をふりかえり、今後の大学生活や将来について考えるよう工夫した。

5. 成果と課題

学生の事後レポートからは以下のような意見があがった。

- ・共同作業を通じてグループの人とコミュニケーションをとることができた。
- ・コミュニケーションをとるのが苦手だったが、少し改善された。
- ・グループで何かを成し遂げるすばらしさを味わうことができた。
- ・話を聞き、森の役割や虫、草、木などすべてが、最終的に人間の生活に影響を与えることがわかり、森林の見方が大きくかわった。(林業)
- ・協力することの大切さ、仕事の大変さや苦勞、発表のまとめや伝えることの難しさがわかった。
- ・今まで環境については、ただなんとなく深刻な問題なんだなとしか思っていなかったが、フィールドワークを通じてはっきりと理解することができ、自分の中の意識が変わった。(産業)
- ・初めは正直行きたくなかった。しかし、活動をしていくにつれ、チームワークの大切さや達成感を味わうことができ、この授業の意味がわかった。

以上のように、本授業のねらいである、活動に直接かかわること、主体的な取組、体験学習の方法の理解、他者との共同についてはある程度の成果をえることができた。

しかし、学生の学習意欲の醸成や事前の動機付けについては改善が必要である。学生が活動に対して、より主体的に関われるよう、事前のオリエンテーションや、講義、事前学習を効果的に設け、体験活動がその場限りのものになってしまわぬよう、体系的な授業運営をしていかなければならない。

V 体験活動を生かしたコミュニティ政策学の展望

本稿は、国の施策や筆者の授業実践から、今後のサービス・ラーニングによる体験活動を用いた、コミュニティ政策学のよりよい学習方法を探ることを目的とした。現在の青少年教育を考える際、直接の体験活動が求められ、またその教育的効果が期待されている。それは、小学生だけというわけではなく、高等教育においても同じである。豊かで便利な社会において、人と直接話す、動植物に直接接触れる、収穫した物を味わうといったように五感をはたらかせて活動を行うことは、人間の本質に迫るものであり、人間の成長に欠かせないものではないだろうか。

また、サービス・ラーニングの「学生が活動分野を自発的に発見・選択し、一定期間、無償で社会奉仕活動を行い、そこでの体験を自らの学問研究と人間形成に発展させていく」という教育手法に則り、単に「やらされている」活動ではなく、学生自身が主体的に活動と関わることで、その学びはより深いものになっていくと考えられる。

淑徳大学における「コミュニティ研究Ⅱ」の実践から、活動を共にすることで仲間との協力や、一緒にやり遂げた達成感といった学生の声があった。体験活動の多くは、個人で行うものではなく、他者や集団との共同により進められていく。体験活動を行うことは、個と個をつなぎ、個と集団をつなぎ、集団と集団をつなぐことができると考えられる。そこには、意見交換や意思疎通といったコミュニケーションが存在する。コミュニティを意識したり、コミュニティをつくる際、コミュニケーション能力は必要不可欠な能力ではないだろうか。

今後、サービス・ラーニングを用いた様々な体験活動を対象に、学生の学習成果や活動の様子、体験活動の提供方法等を調査、分析し、体験活動を通したコミュニティ政策学の学習方法を追求していく必要がある。

文 献

- (1) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」, 2008
- (2) 中央教育審議会「21世紀を展望したわが国の教育の在り方」, 1998
- (3) 文部科学省「教育振興基本計画」, 2008
- (4) 石川 久「コミュニティ政策学とその学習に関する考察」淑徳大学総合福祉学部 研究紀要 44, 2010
- (5) 農林水産省「農山漁村における宿泊体験活動の受け入れのための手引き」, 2008
- (6) 国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書, 2010

Community Studies of Learning from Experience Activity

Naoya TAKI

It aimed the search of the community policy study that used the experience activity by the service learning for a better study method from state measures and author's teaching practices. A direct experience activity is requested when thinking about a present youth education and the educational effect is expected. It is not only a grade-schooler, and the same in the higher education. In a rich, convenient contemporary society, the activity that uses five senses such as speaking with person directly, the direct touch to plants and animals, and tasting the harvested thing approaches the nature of humankind. And, it is an indispensable one for the human growth.

It is thought that the learning becomes deeper by becoming not a compulsory activity but an independent activity based on an educational technique of the service learning. Many of experience activities are advanced by the cooperation of friends and the group. When the community is considered or the community is formed, communications skills are indispensable abilities.

It will be necessary to pursue the method of studying Community Studies that uses the experience activity in the future.